

## 刊行に寄せて

1921年に渋沢敬三によって創設された「アチックミュージアムソサエティ」は、「アチックミュージアム」「日本常民文化研究所」、そして戦後の財団法人日本常民文化研究所の時代を経て、1982年に神奈川大学に移管され、神奈川大学日本常民文化研究所となりました。

本研究所では、創設時以来の理念を受け継ぎ、「常民」の等身大の生活文化を明らかにするため、民具や古文書の収集・整理、漁村・漁業史研究をはじめとする多様な領域を対象として幅広い活動を展開しております。特に、調査・研究にあたっては、創設者渋沢敬三がとねえた“ハーモニアスデヴェロップメント”の精神に基づき、異なる専門分野の研究者が協働で行う共同研究の方法を重要視しながら推進しています。

また、自らの研究の推進とは別に、「常民」研究の発展をめざし、在野の研究者など地域で奮闘するさまざまな研究者や若手研究者の調査・研究を支援する事業を開始し、2010年度からは「常民文化奨励研究」としてグループによる課題を募集することといたしました。この奨励研究事業は、当初、研究所本体の事業として推進してきましたが、2015年度より国際常民文化研究機構の事業へと変更され、今日に至っています。今回刊行する神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第27集は、変更後の3冊目の成果報告書となります。

さて、本共同研究『宮城県気仙沼大島における遠洋漁業の歴史の変遷に関する研究——震災救出資料を中心として——』（研究代表：千葉勝衛）は、伝統的漁船漁業を展開してきた気仙沼大島地域における明治以降の遠洋漁業に関する歴史的考察を行ったものです。この研究対象である気仙沼大島地域には、地域を代表する産業である遠洋漁業に関する貴重な歴史資料を保管していた「大島漁協文庫」がありました。しかしながら、この地域は先の大震災で大被害を受け、貴重な「大島漁協文庫」も流され、所蔵資料は一部の流失や汚損被害を受けてしまいました。この事態を重く見た神奈川大学日本常民文化研究所は、所員とともに大学院生らが中心となって史資料の救済活動を積極的に展開しました。また、併せて、救済した貴重な資料を保管・管理し、地域の人々はもちろんのこと多くの研究者が利用できるための施設の計画も行い、補助金をもとに新たな資料保管施設である「大島漁協文庫」が完成しました。本研究で使用された基本的史資料は、まさしく、こうした救済活動によって再び息を吹き返した貴重な史資料群であり、新たな保管施設に納められ、今後も引き続き保護され利用されていくものなのです。こうした地域に根差した史資料が有効に活用されたことは勿論のこと、貴重な史資料をもとに忘れ去られつつある地元の近代史が記述され、とりわけ、地元の若い人々の目に触れることは、今後の大島地区の歴史と伝統を継承するためにも極めて有意義なものといえます。この研究成果が、大島地区の活性化の源のひとつとなり、有効活用されることを願ってやみません。いずれにせよ、2年間という限られた時間の中で研究に当られた皆様に心より敬意を表し、併せて今後の研究のためにも多くの方々からご批判を含め、ご意見を戴ければ幸いです。

2019年2月

神奈川大学日本常民文化研究所長  
国際常民文化研究機構運営委員長  
内田 青蔵